はじめに

自然学校という言葉が我が国で使われて20数年、徐々にではあるが定着しつつある。本書第１編でも述べられているように、当初、自然体験を中心とした環境教育の場であった自然学校が、この20年の社会環境の変化の中で過疎に悩む中山間地域における持続可能な地域づくりの拠点や地域の小さなビジネス、あるいは社会的企業として評価されるようになってきた。

我が国で自然学校が生まれて間もない20年前、地球サミット（国連持続可能な開発会議、1992）が開催され、持続不可能な社会から持続可能な社会への転換を促す「持続可能な開発」に向けた行動を国際的に提起した。しかし残念ながら、地球サミット以降、持続不可能性はますます進行してしまった。とりわけ東日本大震災、さらには福島第一原子力発電所事故の大惨事は持続可能な社会のあり方を私たちに鋭く問いかけている。

ESD（Education for Sustainable Development：持続可能な開発のための教育）はこの「持続可能な開発」をあらゆる教育や学びの中心に据え、環境の視点のみでなく社会や経済といった広い視点から総合的・統合的に持続可能な社会の担い手を育てる活動である。特に、2002年の持続可能な開発に関する世界首脳会議（ヨハネスブルグサミット）で日本のNGOと政府が2005年からの10年を「国連持続可能な開発のための教育の10年」にするよう提唱し、国連総会で決議・実施されたことを契機に国際的に取り組まれている。

立教大学ESD研究センターは、ESDの国連の10年とも連動しながら、特に指導者養成に焦点を当てながら、国内外のESDを推進する実践的研究のために2007年に設立された。ESD研究センターでは、当初より自然学校のESDとしての機能に注目し、公益社団法人日本環境教育フォーラムなど、自然学校の推進組織と連携しながら、日本全国の自然学校を俯瞰し、その到達点と課題を明らかにするシンポジウムを2度に（2010，2011）にわたって開催した。

これらのシンポジウムを通じて、自然学校への社会のニーズが急速に高まってきていること、このため従来のNGO/NPOによる取り組みにとどまらず

国や自治体、企業といった多様な主体によって取り組まれるようになってきたこと、さらに持続可能な社会への変革を促す基点、まさにチェンジエージェントとしての機能を果たす自然学校の役割が見えてきた。

国連ESDの10年のユネスコによる最終会合は、2014年に岡山、名古屋で開催されることが決定したが、残念ながら、ESDという言葉は未だ日本では普及していない。しかし、自然学校の事例に見られるように、我が国には優良なESDの事例が多く存在する。このため、立教大学で行った2度にわたる自然学校シンポジウムの成果をまとめつつ、ESDの視点から自然学校の果たす役割を明示し、今後の我が国のESD並びに自然学校の発展、ひいては持続可能な社会の構築に寄与することを目的に本書を刊行する。

本書を参考に、自然体験や伝統文化の体験といった教育活動はもちろん、地域を元気にする持続可能な社会づくりとしての自然学校の運動が全国に広がることを期待している。

なお、本書は3編で構成されている。第１編では、日本の自然学校の主導者の面々により、自然学校の基本から今日的な役割までを簡潔にまとめていただいた。第２編は、2010年3月に開催した「自然学校は地球を救う」シンポジウム、第3編は、2011年3月に開催された「自然学校宣言2011」シンポジウムの報告書を中心に構成した。また資料編として「2010年自然学校全国調査」の分析と報告書（抜粋）を掲載した。

編者を代表して
立教大学ESD研究センター長　阿部　治

出版にあたって

立教大学ESD研究センター　CSRチーム主幹　川嶋　直

2010年、2011年いずれも3月2日に「自然学校」をキーワードに立教大学で開催されたシンポジウムの報告書を合冊し、それに現在日本の自然学校を代表する実践者と立教大学ESD研究センターの研究者が「ESD拠点としての自然学校」としての位置付けを明確にしたのがこの本です。

おことわり

編集の都合で2010年のシンポジウム並びに2011年のシンポジウムの報告書の全ての再録となっていない部分があります。（この本に載せられなかったものは以下です。）

2011年シンポジウム「中央省庁が見る自然学校」の報告
2011年シンポジウム「特定非営利活動法人ECOPLUS」の報告
（同団体が2010年のシンポジウムでも報告しているため）
2010年・2011年の各報告者のパワーポイント画面の一部
2010年・2011年のパネルディスカッションでの各パネリストのフリップボード（各発言の前に見出しの形で掲載した）
自然学校全国調査報告の各種グラフ（約40画面）

・上記が削除されていない2010年・2011年のシンポジウムの報告書は「立教大学ESD研究センター」のホームページ（http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/ESD）から、自然学校全国調査報告は「NPO法人日本エコツーリズムセンター」のホームページ（http://www.ecotourism-center.jp/）からそれぞれダウンロードすることが出来ます。
・なおシンポジウム報告者の肩書は当時のものです